

手賀沼の水の残留農薬分析結果を受けての勉強会

日時：2024年1月16日（火）13:30～16:00

会場：手賀沼親水広場 水の館 研修室

講師：小倉久子さん（美手連顧問、元千葉県環境研究センター水質環境研究室長）

出席：手賀沼流域フォーラム委員、美しい手賀沼を愛する市民の連合会会員、我孫子市農政課 23名

目的：3回の分析結果の数値の持つ意味について知る。

初めに講師から分析方法・分析値の単位について丁寧な説明があり、2月と5・7月の分析の違いを理解できた。2月のスクリーニング調査では、流域に水田がほとんどない大堀川を含め全地点から、微量ながら複数の農薬成分が検出され、畑や一般家庭等からの流出の可能性も推察された。7月調査はドローンによる空中散布（拡散影響が少ないとされる）の直後に行い、高濃度のネオニコイド系およびネオニコ類似農薬が検出された。この時期はカメムシやイモチ病防除のために農薬散布が多く行われており、それを反映する結果となった。グリホサート（除草剤）は出荷量も参考に示され、ネオニコチノイド系農薬よりも桁違いに多く出回り、手賀沼でも汚染が進んでいることが懸念される。（45・46ページを参照ください）

【質疑応答】

Q：農薬に汚染されていないと予想した大堀川北柏ふるさと公園で、他地点と同様に検出されたのは、北千葉導水による利根川の水の注入が影響しているのではないかと。

A：利根川は上流で農業や畜産が盛んで窒素濃度が高い。農薬の流下も考える必要があるかもしれない。

Q：グリホサートは散布後すぐに効果が出て、土に触れると効果が無くなると宣伝しているが。

A：グリホサートの分解物 AMPA はグリホサート以上に毒性が強く、いつも検出されている。流域から絶えずグリホサートが供給されているためと考えられる。

Q：農薬の残留濃度基準はあるのか。

A：その水を一生飲んでも大丈夫という基準（急性毒性）がある。本来は環境ホルモンの基準や生態系への影響配慮も必要と思うが。山室先生のネオニコチノイドの研究によると、浄水場で高度に除去された水道水からは出ないが、山村の水道水から検出されることがある。

Q：ハス・ヒメガマの衰退からこの調査が実施されたが、除草剤との関連で判ったことがあれば教えてください。

A：残念ながらわからない。12月の船上調査では、抽水植物がジワジワと元気がなくなっている（39・40ページ参照）。ヒメガマ・マコモは水中に生えているものの衰退が著しく、ハスは陸上の湿地に何本かあるのみ。個人的な感覚は、手賀沼の水にワルサをするものが含まれている可能性を疑う。

Q：まとめとして「汚染」という言葉が使われているが、適切か。データを蓄積して、安心して手賀沼に親しめる水質なのかを知りたい。

A：化学物質は0であるのが本来の姿なので低濃度であっても汚染と言ってよい（影響の有無は別）。県も農水省もカメムシ防除を推奨している。大きな被害が出ないためには必要だが、カメムシ対策は米が黒くなり等級が落ちることを防ぐため、黒斑米を分離する機器ができていることもあり、過度なきれいさを求める消費者も意識を変えていくべきと思う。

【今後に向けて】

勉強会では、来年度も調査を継続してデータを蓄積するべきとの意見もありましたが、手賀沼流域フォーラム実行委員会では、今後の方針を次年度も継続して検討していきます。